

Newsletter

No.54

OCTOBER 2015



カレドニア(CALEDONIA)はスコットランドの雅名
その国花は薊(あざみ)

伝統の存続—辺境に残る古きよきもの

三原 穂

1765年に2巻本で出版されたジェームズ・マクファーソン(James Macpherson)編『オシアン作品』(*The Works of Ossian*)に収められた「カーソンの詩」(“Carthon: A Poem”)には、バルクルーサ(Balclutha)の王カーソンが、フィンガル(Fingal)の領地に攻め込んで最初は優勢を示していたが、フィンガル側についていた父クレサモー(Clessanno)に倒されまさに死なんとする時に、「私の名声が歌に歌われ偉大なものになるように、ああ、[フィンガル]と戦っていたらよかったのに」と後世の人々に自分の名声が知られずに死ぬことを嘆く場面がある。¹この嘆きに対しフィンガルが次のように反応する。

おお、カーソンよ、私の多くの吟遊詩人が歌を後世に伝える。後世の者たちは、篝火として燃える檜の木のまわりに座って、歌人が歌う昔の歌を聴いて夜を過ごす時、カーソンの名声を耳にするだろう。ヒースの中に座って休んでいる狩人は、一陣の風にヒースがざわめくのを聞き、目をあげて、カーソンが倒れた岩を眺めるだろう。その狩人はその息子の方を向いて、次のように言いながら、その兵[カーソン]が戦った場所を息子にみせるだろう。「バルクルーサの王はそこで戦ったのだ。その戦いぶりはあたかも千もの流れが集まってたいへんな力をみせるかのようだった」と。

(*The Works of Ossian* 1: 197)

フィンガルは敵ながら立派に戦ったカーソンを称賛し、カーソンの死後の名声を保証している。カーソンの名声は、吟遊詩人によって後世に歌い継がれると同時に、「カーソンが倒れた岩」すなわちカーソンの墓場をみる狩人の父から子へ、子から孫へと伝えられていくことになるのである。²

このような歌を歌い聴くことによって現在と過去そして未来が互いに結びつく共同体が、ハイランドから消え去りつつあることをマクファーソンは嘆くのである。

『オシアン作品』の第1巻の巻頭の「フィンガルの息子オシアンの詩の古さ等に関する論文」(“A Dissertation concerning the Antiquity, Etc. of the Poems of Ossian the Son of Fingal”)において、マクファーソンは「商工業の到来は、かつては古い昔の歌を聴いたり暗唱したりすることに捧げられた余暇を破壊したのである」というように、太古の昔からの伝統の宝庫であるハイランドが商業文明に晒されて危機的状況に陥っていることを指摘している(1: xxii-xxiii)。商業文明の恩恵を受けようとハイランドを離れる者が多くなっており、故郷を去る彼らが他国の文

化風習に感化され、自らの先祖たちの時代から長く続いている伝統を忘れるようになっていく現状にマクファーソンは不安を抱いている(*The Works of Ossian* 1: xxiii)。ハイランドの先祖たちの武勇譚はもはや重んじられることなく人々の心を慰めることもなくなり、伝統が後の世代に伝えられなくなってしまう。このように伝統が途絶えてしまいそうな状況を心配しつつも、マクファーソンは、「しかしながら彼らは先祖たちの美点を放棄したわけではない」と述べ、ハイランドには「今でも歓待は生き残っているし、見知らぬ人への滅多にないほどの親切さも残っている」と続けている(*The Works of Ossian* 1: xxiii)。マクファーソンの主張が意味するのは、古きよきものは、連合王国においてはスコットランドという辺境のさらに辺境のハイランドのような地域にしか存在しえないということなのである。

伝統が途絶えることに対するマクファーソンの危惧からは、なぜか妙な懐かしさが感じられてしまう。1960年代から70年代に団塊世代の金の卵の若者たちが集団就職のため地方から都会に出ていくのを心配して見送る彼らの姿とマクファーソンの危惧が重なるからであろうか。³現代の日本では、商業文明に関する中央と地方の差は、IT技術の普及と最近急激に成長を遂げているLCC等の発展によってなくなりつつあるように思われる。もはやスコットランドでも日本でも辺境はなくなったと言ってもよいのかもしれないが、やはり辺境の土地に、昔も今も、古きよきものを求めたいものである。その追求こそが、研究というかたちであれ、あるいは他のかたちであれ、伝統の存続につながるのかもしれない。(琉球大学)

¹ James Macpherson, ed., *The Works of Ossian, the Son of Fingal*, vol. 1 (London: Becket, 1765) 196-97.

² このエッセイの冒頭からこの箇所までは、以下の拙著に基づくものである。三原 穂『学術研究と文学創作の分化—18世紀後半イギリスの古詩編集』(音羽書房鶴見書店、2015年)44-45。

³ 団塊世代の集団就職に関する情報は以下のウェブサイトを参考にした。「週刊ニュース深読み」*NHK Online* (2015年6月20日)、インターネット・ホームページ <http://www1.nhk.or.jp/fukayomi/maru/2015/150620.html>、2015年8月12日参照。

参画と多文化のナショナリズムと民主主義

森川 由美

今年 5 月の英国総選挙では、スコットランド国民党 (Scottish National Party: SNP) がスコットランド選出の 59 議席中 56 議席を獲得した。この結果を受けて、来年のスコットランド議会選挙で SNP が勢力を維持すれば、再び独立住民投票が実施されるのではないかとされている。昨年来、こうしたスコットランド独立をめぐる政治状況を日本の報道で目にするとき、「民族主義」という言葉に出会う。「民族主義」は「ナショナリズム」の和訳であるが、スコットランドのナショナリズムとは、「シビックナショナリズム」である。シビックナショナリズムは血統や宗教などのエスニシティではなく、住んでいるネイションの営みに市民として参画して社会・文化を創り上げていくことを重視する民主的な概念である。他方、「民族主義」という日本語は「エスニックナショナリズム」に近い概念である。

シビックナショナリズムだからこそ、「民族自決」というエスニックナショナリズムによってアイルランドをはじめ多くの国家が誕生した第一次大戦直後に、スコットランドでは独立運動が展開されていない。確かに、アイルランド自治運動が広がった 19 世紀末から 20 世紀初めにかけては、スコットランドでも自治運動が展開された。しかし、スコットランド自治運動はアイルランドのように独立を標榜せず、シビックナショナリズムによる英国の行政機構の効率化をめざす地域分権の文脈による自治運動であった。つまり、スコットランドの市民であることはスコットランド社会に参画するだけでなく、スコットランド社会の改革のために、英国国家に参画するという論理である。こうした論理が機能したのは、当時のスコットランドでは、自由党英国政府が行う政治に合意できる層が多数派だったからである。現在の独立機運がここまで高まったのは、英国国家に参画してもスコットランド社会がよくなると考える人々、すなわち、英国政府が展開する政治に合意できないスコットランドの人々が多数存在することにある。したがって、スコットランドの現在の独立運動と当時の自治運動は、「英国離脱」と「英国内維持」という正反対の方向性をもつ政治運動ではあるが、両者ともシビックナショナリズムを基盤にしていることに違いはない。

では、このスコットランドのシビックナショナリズムの起源は何なのであろうか。シビックナショナリズムがエスニシティではなく住んでいること・参画することに注目する点は、多文化主義と重なる。スコットランドの多文化主義はアープロース宣言に遡ったハイランドとロウランドの統合の史実が起源とされることから、スコットランドのシビックナショナリズムも起源もここにあるといえよう。こう考えると、設立当初は「タータントーリー」と揶揄されるほどエスニックナショナリズムに傾いていた SNP が、スコットランドらしさを追求すればするほど、エスニックナショナリズムから距離を取り、シビックナショナリズムを強調していったのは理に適っている。

このように、参画と多文化を重視するシビックナショナリズムという観点から眺めてみると、現在のスコットランド独立運動は、参画と多文化を重視するシビックナショナリズムに関しては 1 世紀前の自治運動の延長線上にある。今後の独立運動の展開については未知数ではあるが、スコットランドにおいてどのように人々が政治に参画し、多文化がどこまで包摂されていくのか、それはこれまでにない新たなナショナリズムや民主主義の形の萌芽を含んでいるといえるだろう。(明治学院大学)

◆日本カレドニア学会第 2 回研究会報告

2015 年 7 月 18 日 (土) に同志社大学寒梅館 6 階会議室にて、日本カレドニア学会第 2 回研究会が行われた。日本カレドニア学会代表幹事・櫻井雅人氏より開会のごあいさつをいただき、続いて、研究発表を行った。まず、「口頭伝承と文字の中の『Fair Margaret and Sweet William』」と題して、山崎遼氏が当該バラッドにおける夢を中心に、当時の民間信仰、疫病との関わり、埋葬の習慣などについて論じられた。次に、「叙事詩の空間：James Hogg, *The Queen's Wake* (1813, 1819) における空間造形の特性」として、吉野由起氏がホッグの代表作にみられる近代スコットランドの神話化・脱神話化の過程について考察された。両氏の発表に続く質疑応答では、複数の質問やコメントが述べられ、有意義な意見交換が行われた。

休憩をはさんで後半は、鶴野祐氏による「ミニ・ケイリー」が行われた。1 部「スコットランド民話をよもう」では、「ちっちゃなバノックパン」と「美しい乙女と泉の妖精」という 2 つの民話を参加者全員で輪読した。2 部「スコットランド民謡をうたおう」では、2 つの子守唄「Highland Fairy Lullaby」、「Bressay Lullaby」を唱和した。鶴野氏による興味深い解説と穏やかな歌声に教えられ、スコットランド民話・民謡に親しむ、心豊かな時間を過ごすことができた。

研究会の後、寒梅館 7 階のフレンチレストラン Will にて懇親会が行われた。当日は、台風 11 号通過の影響で交通機関に乱れがあり、研究会への参加が心配されたが、幸い、多くの出席者に恵まれ、第 2 回研究会は盛会であった。悪天候の中、ご参加・ご協力いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げたい。(金津 和美記)

◎研究発表要旨

口頭伝承と文字の中の『Fair Margaret and Sweet William』

山崎 遼

口承と文字の両方において影響力を持ったバラッドの一つに『Fair Margaret and Sweet William』がある。1611 年には既に口承で存在したことが判明しており、1720 年代に入るとこれを基にした二つのバラッド詩 (David Mallet による「William and Margaret」と Thomas Tickell による「Lucy and Colin」) が出版されている。本発表では、Peabody が提唱した「筋」と「情報の核」という理論をもとにこれらの三者を比較し、口頭伝承と文字文化における物語の共通点や差異を明らかにすることを試みた。

『Fair Margaret and Sweet William』の情報の核のうち、意味や機能の不明瞭な「悪夢」の核は謎めいた存在である。また悪夢の核は幽霊の核と共にプロットに並列構造を形成している。これに加えて、夢の内容が版によって様々であることも謎に拍車をかけている。発表では悪夢における色・豚・液体のイメージという三つの共通点を踏まえた上で悪夢の解釈を行い、その結果悪夢はマーガレットの死、彼女の経験した痛みと苦悩、そしてウィリアムの結婚生活の破綻を暗示しているという結論に至った。

『Fair Margaret and Sweet William』では全体像から抽出した核それぞれの量的バランスが保たれていたが、関連バラッド詩では伝承の持っていた核の均衡状態が崩れていることが判明した。また、これらのバラッド詩では先述した悪夢の核が消失するなど物事の因果関係を曖昧にする核が排除されて筋が明確化されていることも解明された。この比較分析から、伝承バラッドの歌い手と詩人では、物語の全体像の中からどの核を抽出し、それらをどう扱うかが異なることが明らかとなった。

(立命館大学大学院)

叙事詩の空間：James Hogg, *The Queen's Wake*(1813,1819)
における空間造形の特徴

吉野 由起

本発表は James Hogg の野心作 *The Queen's Wake* (1813, 1819)における空間造形の特徴の考察を試みた。縦横無尽にジャンルを横断し創作を行った Hogg の筆に織り成される語りの実験性・前衛性は、先行研究で繰り返し指摘が行われてきた独創性溢れるものである。その語りによって構築されたテキスト空間も極めて独特な例が多く、たとえば *The Pilgrim of the Sun* (1815)では生々しく堅固な日常性と物理性を持つ土地が、主人公の天上の世界との往復によって遠く希薄化される。意図的な地名の使用と妖精・夢・魔法のレトリックを通したスコットランドの風景の再魔術化・脱魔術化の反復による、独特な空間造型の様態には、Hogg の芸術家としての側面に加え、土地と日常的に、時に切実に対峙した羊飼いととしての側面が交錯するのみならず、合同後一定の時間を経たスコットランドという地理的・文化的・歴史的・政治的空間を Hogg がいかに捉えたかという問題も通底すると考えられる。以上の問題意識に基づき、本発表では、Walter Scott と Hogg 両者による妖精譚に共通して内在すると考えられる「もう一つのナショナル・テイル」としての意義を指摘し、続いてポスト・ユニオン期のスコットランド表象史を先行研究にもとづき概観した上で、*The Queen's Wake* における空間表象の検証を目指した。

(三重大学)



◆会員執筆ニュース

アラン・H・アダムソン著、樋口陽子 訳

『ミスター・シャーロット・ブロンテ：アーサー・ベル・ニコルズの生涯』

(彩流社、2015年2月) 322頁、本体4200円＋税。

三原 穂

『学術研究と文学創作の分化—18世紀後半イギリスの古詩編集』

(音羽書房鶴見書店、2015年6月) 161頁、本体2400円＋税。

江藤秀一・照山顕人 編著

『大人のためのスコットランド旅案内』

(彩流社、2015年6月) 336頁、本体2500円＋税。

木村正俊・太田直也 編

『ディラン・トマス：海のように歌ったウェールズの詩人』

(彩流社、2015年7月) 389頁、本体4200円＋税。

木村正俊 編著

『スコットランドを知るための65章』

(明石書店、2015年9月) 385頁、本体2000円＋税。

会費納入のお知らせ

学会費(5000円、学生会員は3000円)を未納の方は、郵便振替にて下記までお振り込み下さい。

郵便振替口座 00230-5-8328 日本カレドニア学会
(8328 は右詰めでご記入下さい)

研究ファイル

ジェイムズ・ボズウェルの イングランド・コンプレックス

江藤 秀一

1762年11月15日、ボズウェルはエディンバラからロンドンへ向かった。ベリック、ダラム、ドンカスター、そしてピグルズウェイドを経て、11月19日、ボズウェルはロンドンに到着した。ロンドンでは芝居見物を楽しみつつ、イングランド風の「優雅で控え目な所作」を獲得するために、同郷のスコットランド人たちとの交流を控えようと努める。ロンドンでスコットランド人ばかりと付き合っていると、エディンバラにいるのと何ら変わらないと考えたのであった。

ボズウェルは何よりも、同郷人が集まって大騒ぎをすることに我慢がならなかった。グリーンパークに出かけた日のこと、多くのスコットランド人が集まってきたのだが、話の内容にうんざりして、ボズウェルはその野蛮で気品のない集団から静かなテンプルまで逃れてほっとしたのであった。

言葉の獲得もボズウェルらスコットランド人の重要な課題であった。ボズウェルはスコットランド人であるということに誇りを持ちながらも、同朋のスコットランド人の粗野な振る舞い、強いスコットランド訛りには劣等感を持っていた。ボズウェルの日記には「ミラー夫人の不快なグラスゴーの言葉は私には苦痛だった。私はスコットランドの西部出身の女性が同席を許されているところでは2度と一緒に会食をしないと決めた」、

あるいは「イングランド人とつきあいたい、そして、その言語を得たい」と記してある(注)。

ロンドンでボズウェルは上品な上流階級と接するにつれて、祖国スコットランドの人々の「野暮ったい」言葉や振る舞いが鼻についたようである。ボズウェルは自分がスコットランド人であることを言葉の上でも知られないようにしようと努め、また「野蛮なスコットランド人」という汚名を着せられないように気をつけた。

1707年の合同以後、より多くのスコットランド人がロンドンにやってきた。ボズウェルはこれまで述べてきたように、何とかイングランド英語を身につけて、イングランド風(とボズウェルが思い込んでいる)の振る舞いをしようと努めた。ボズウェル以外でロンドンを訪れた人々は、言語や振る舞いについてどのような態度を取ったのであろうか。地方出身の人間の持つある種の劣等感のようなものをボズウェル同様に感じていたのであろうか。それとも啓蒙の地であるスコットランドを誇りに思い、言語や振る舞いには無頓着であったのであろうか。ボズウェルと同時期にロンドンに出てきた他のスコットランド人の日記や手紙があれば、比較してみたいものである。(筑波大学)

(注) ボズウェルの日記は以下を参照した。Frederick A. Pottle, ed., *Boswell's London Journal 1762-1763*, Edinburgh University Press, (1950) 1991.

◆2016 年第 1 回研究会

日時：2016 年 1 月 30 日(土) 15:00 ~ 16:30

場所：拓殖大学茗荷谷校舎 教室未定

(東京メトロ・丸ノ内線 茗荷谷駅下車、徒歩 5 分)

発表者：有元 志保氏 (静岡県立大学短期大学部)

論題：ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの
作品にみる分身の変遷

◆サイモン・W・ホール博士講演会

「スコットランド文化の多様性を探る：オークニー
諸島の文化的・文学的アイデンティティーを中心に」オークニー諸島出身のスコットランド文学研究者、サ
イモン・W・ホール博士を招聘してスコットランド文化
の多様性をテーマとする講演会を開催します。スコットランド人としての重層的なアイデンティティー
や、北欧ともつながりの強いスコットランド独自の言語
文化について、文学的な観点からわかりやすく解説しま
す。(日本語の通訳付き)

日時：2015 年 11 月 14 日(土)

13:30 開場 14:00 開演 16:30 終了予定

終了後、会場付近で懇親会を行います。

場所：拓殖大学文京キャンパス C館 4 階 407 教室

東京メトロ丸ノ内線 茗荷谷駅より徒歩 5 分

事前申込み不要/ 参加費無料 (懇親会費別)

問い合わせ：米山 優子氏

Email:

主催：サイモン・W・ホール博士講演会実行委員会

協賛：静岡県立大学

後援：日本カレドニア学会 NPO 日本スコットランド協
会

◆NPO 日本スコットランド協会(JSS)

◇関西茶会倶楽部 第 5 回

サントリー山崎蒸溜所見学

日時：11 月 1 日(日) 14:00 ~ 16:00

(13:30 に蒸溜所受付前に集合)

場所：サントリー山崎蒸溜所

(大阪府三島郡島本町山崎 5-2-1)

講師：三鍋 昌春氏

会費：1000 円 *申し込み締め切り：10 月 26 日(月)まで

◇関西茶会倶楽部 第 6 回

日時：2016 年 1 月 24 日(日) 14:00 ~ 16:00

場所：神戸倶楽部 (神戸市中央区北野町 4-15-1)

講師：國田 あつ子氏

会費：3000 円 (会員) 3500 円 (一般)

問い合わせ：日本スコットランド協会

TEL/FAX:03-6380-5256

E-mail:

◆日本ケルト学会

◇第 35 回 日本ケルト学会 研究大会

日時：2015 年 10 月 17 日(土)、18 日(日)

17 日、12:30 ~ 受付開始

場所：慶應義塾大学 日吉キャンパス

来往舎 2 階 大会議室

13:10 ~ 13:55 個別報告 1

Excommunication and Reconciliation in Buile Suibhne

報告：Patrick Paul O'Neill 氏

13:55 ~ 14:40 個別報告 2

『シェンハス・モール』の 7 世紀 一括制定説をめぐる
て

報告：廣野 元昭氏

15:00 ~ 15:45 個別報告 3

John Morris-Jones の『カムリ語正書法』と『ケルズ・ダ
ヴォッド』(韻律規則集)ーカムリ語正書法成立における韻律規則「カングハネ
ズ」の重要性

報告：小池 剛史氏

15:45 ~ 16:30 個別報告 4

J.R.R. トールキンの『中つ国 (ミドル・アース) における
マイノリティ言語 - Dúnlendish

報告：辺見 葉子氏

16:30 ~ 17:15 個別報告 5

トマス・ペナントの旅行記に現れた愛国者たち - オワ
イン・グリーン・ドゥールを中心に

報告：吉賀 憲夫氏

10 月 18 日(日)

10:00 ~ 10:45 個別報告 6

Saga af Tristramok Ísodd およびその関連作品における女性達

報告：林 邦彦氏

11:00 ~ 12:30 基調講演

マロリー以降 - 『アーサーの死』の出版と中世復興と
大英帝国

報告：不破 有理氏

13:45 ~ 16:45 フォーラム・オン 司会：渡邊 浩司氏

メインテーマ：近現代のケルト文化圏におけるアーサー
伝承の位置づけ - アイルランド、ウェールズ、ブルター
ニュの事例から

報告 1 アイルランド語文学におけるアーサー王伝承

報告：平島 直一郎氏

報告 2 中世文学の再発見と「ケルト共同体」の創出

報告：梁川 英俊氏

報告 3 ウェールズのアーサー物語における「ケルト性」
の問題

報告：森野 聡子氏

参加費：一般 1000 円、学生 無料

懇親会費：一般 5000 円、学生 2000 円

大会責任者：辺見 葉子氏

Email:

◇東京研究会

日時：2016 年 1 月 23 日(土) 14:30 ~ 17:30

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

来往舎 2F 中会議室

講師：ナタリア・ペトロヴスカイア氏 (ユトレヒト大学
ケルト学部講師)演題：「中世ウェールズのオリエンツ観」(Medieval
Welsh Perceptions of the Orient)

なお、講演は日本語で行われます。

◆イギリス・ロマン派学会

◇第 41 回イギリス・ロマン派学会全国大会

日時：2015 年 10 月 17 日(土)、18 日(日)

場所：奈良教育大学 (奈良県奈良市高畑町)

*詳細につきましては、イギリス・ロマン派学会の web ペー
ジをご参照ください。

日本カレドニア学会 Newsletter 第 54 号

2015 年 10 月 8 日発行

編集発行人 日本カレドニア学会代表幹事 櫻井雅人

<http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/>

事務局 聖徳大学 高松 晃子 研究室

〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550

Newsletter 編集担当 江藤秀一、野口英嗣、米山優子

(連絡先) 〒305-8571 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

江藤研究室 TEL 029-853-4127